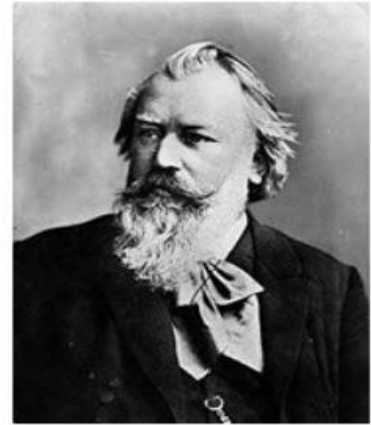


「ドイツレクイエム」歌詞に学ぶ(1)

当歌う会音楽監督 横島勝人先生の「ブラームスを語る」スペシャルトークでブラームスの生涯とその音楽そしてドイツレクイエムについて基本的なことを学びました。

それで次に歌詞の意味を少々詳しく理解したいと思いました。その歌詞は聖書からブラームス自らが選んだ聖句(文章)だと教わりましたが、聖書になじみの薄い私たち日本人にはすぐに理解しにくい事柄が多い。それで、Webや書物から解説を取り出し整理してみました。団員各位のレクイエム合唱習得とレベルアップに少しでもお役立てできれば幸いです。誤解や理解不十分なところもありませんがご容赦ください。



晩年(全盛期)のブラームス

(1) ドイツレクイエム全体の特徴と構成

すでに学んだドイツレクイエムの特徴をあらためて記すと以下の3点です。

- 死者の霊を慰める音楽でなく、生きる人々を慰め勇気づけ、人生の指針を示す音楽である。
- 歌詞はカトリックの典礼文でなく、聖書からブラームスが自ら選んだ言葉である。
- 教会音楽でなく、演奏会用音楽である。

㊤ カトリックの典礼文レクイエムは(以前モツレクで歌ったように) Requiem aeternam dona eis, Domine(主よ、永遠の安息を彼らに与えたまえ)と歌います。仏教では死者の霊に直接呼びかけるのですが、キリスト教では「死者の霊に安息を与えてください」と神に祈ってお願いする。この違いがあることをまず理解しましょう。キリスト教では「神」は唯一絶対の存在で全知全能であり、死者の霊も神の支配下にあるとされる。これが基本だと思われます。「レクイエム」という語が今一般に死者を追悼する音楽の通称として使用されていますが正確でないという論もあります。)



若き日のブラームス(レクイエム完成の33歳—全曲初演35歳ごろ)

㊤ ドイツレクイエムは典礼文でないと言っても聖書(宗教改革で知られるマルティン・ルターがドイツ語に翻訳した聖書)から取り出した歌詞ですからキリスト教の教え(原理)に則っています。典礼文レクイエムと同様に、神(創造主)の力、人生の無常、死の運命などを歌います。演奏会用音楽ですが宗教音楽ですからキリスト教について大枠を知ることは音楽を理解するために非常に大切だと思います。そして作曲者ブラームスの意図を知ることができればドイツレクイエムの練習も一層楽しくなると思います。

注:ラテン語のレクイエムはカトリック教会の典礼文ですが、ブラームスはプロテスタントです。プロテスタントの教会では統一の典礼文はないのです。

㊤ 曲全体の内容・特徴……ドイツレクイエムには「悲しみ」「嘆き」「涙」「不安」という語がたくさん出てきます。これは「亡くなった人への思いや悲しみと残された家族の嘆きを表している」と解釈できますが、さらに「悲しみ」とは「死」に対する悲しみだけでなく、人生の悲哀も含む。人の一生

には多くの悲しみ・苦勞があり、報われないまま亡くなる人も多い。だから人生はつらく悲しいものだ。死期が来て一生を終わるとき、悲しさと空しさでいっぱいになる。そんな人々に、「神を信じ従っていけば必ず慰められ、悲しさは喜びに変わって行くのです」と言っていると解釈できます。

一方で「慰め」「喜び」「幸い」「望み」「安らぎ」など明るい言葉も数多く出て来ます。それは「苦勞が報われて喜びに変わる」ことを意味しています。

④ 第1曲冒頭の“Selig”は「この上なく幸せな」「至福の」という感嘆を意味する語でドイツレイエムのキーワードともいえます。原語(ギリシャ語)では「ああ、なんと祝福されていることよ」の意。「神の愛と救いにいのちのよこびと満足を得ている」状態。(キリスト教の「救い」の状態のこと。)

キリスト教であれ仏教であれ、人は自分のいのちと人生を切に思うことに差はないということでしょうか。ブラームスは「ドイツレイエム」を「ドイツ語のレイエム」として書いたが「人間レイエム」と呼んでも構わないと友人への手紙に書いていたそうです。間違いなく人生を考え、死とは何かを考える曲ですね。

「全体を構成する7つの曲は、次第に力を増す第1～3曲《苦惱から希望へ》、安らかな第4, 5曲《喜びと慰め》、激動から静に戻る第6, 7曲《復活と報い》の3群のアーチ構造とみることができます。第1曲と第7曲が、第2曲と第6曲が、第3曲に第5曲が対応しています。」(Webより)

(2) 楽曲の内容

(A) 第1曲

Selig sind, die da Leid tragen, denn sie sollen
getrö
stet werden.

祝福されたるは、悲しみを負う人。彼らは慰められるのですから。 (マタイ福音書5:4 「山上の垂訓」の一節)

「悲しんでいる人は幸いです」から始まる冒頭の歌詞はドイツ語の語順では「幸いです、悲しむ人は」です。曲が「幸い」から始まっていることに注目したい。この聖句は欧米では非常に有名で、8種類の「幸いな人」のなかの2番目の語句です。欧米人は「悲しむ人・・・」の前後の聖句を知っているのですぐ理解できますが、私たちには唐突な感じを受けます。それで聖書の「悲しむ人・・・」の前後の文章全体を以下に記します。(マタイ福音書5:3～《至福の教え》ともいう。



山上の垂訓 カール・ハインリッヒ・ブロッホ 画

- ・心の貧しい人は幸せです。天の御国はその人のものだからです。
- ・悲しむ人は幸いです。その人は慰められるからです。
- ・柔和な人は幸いです。その人は土地を受け継ぐからです。
- ・義に飢え乾いている人は幸いです。その人は満たされるからです。
- ・憐み深い人は幸いです。その人は憐みを受けるからです。
- ・心の清い人は幸いです。その人は神を見るからです。
- ・平和を実現する人は幸いです。その人は神の子と呼ばれるからです。
- ・義のために迫害される人は幸いです。天の国はその人達のものだからです。

聖書の文章は逆説的な表現が多く、理解しにくいですが、実はそこに真実があるとも言われています。たとえば幸いな人とは決して社会での成功者でない、悩み悲しんでいる人こそが神から祝福を受け慰められ

るのだと言っています。このように悲しむ人がいつか慰められる日の来ることを望む音楽がドイツレクイエムの序曲となっています。

Die mit T r aenen saeen,werden mit Freuden ernten.

涙とともに種を蒔く人は、 喜びの歌とともに刈り入れる。 (詩編 126 : 5)

Sie gehen hin und weinen und tragen edlen Samen、 und kommen mit Freuden und bringen ihre

Garben.

種の袋を背負い泣きながら出て行った人は、束ねた穂を背負い喜びの歌を歌いながら帰ってくる。(詩編126:5,6)

この時代のヨーロッパの農民は苦しい生活を強いられていた。本当に涙しながら種を蒔いていたので、それを曲の歌詞で例にあげるのはわかりやすかった。人の世の悲しみを知っている人たちこそ心から人を思いやることができるし、神の憐れみと愛によって悲しみが喜びに変わる時が来ることを信ずることができる。

(B) 第4曲

Wie lieblich sind deine Wohnungen, Herr Zebaoth!

万軍の主よ、あなたのいますところは、どれほど愛されていることでしょう。(詩編 84 : 2)

Meine Seele verlangt und sehnet sich nach den Vorhoafen des Herrn;
mein Leib und Seele freuen sich in dem lebendigen Gott.

主の庭を慕って、私の魂は絶え入りそうです。 命の神に向かって、私の身も心も叫びます。

(詩編 84 : 3)



ウィーン中央墓地にある音楽家の墓 32A ブラムスの墓

Wohl denen, die in deinem Hause wohnen, die loben dich immerdar.

いかに幸いなことでしょう、あなたの家に住むことができるなら、まして、あなたを賛美することができるなら (詩編

84 : 5)

「あなた」=神

「万軍の主」=神はいと高き方で、万物を創造し、全知全能ですべてを統治されるお方である。

「生ける神」=神には命(いのち)があり、神様に近づいた者にも本当の命を与えることができる。(人は自分の罪に気がつかないうちは、生きていても死んでいると聖書では言う)。「神がすべての生の源泉」だという思想。

悔い改め信ずることによって神の心のなかに住まわせて頂くことのできる人はなんと幸せなことでしょうと歌っています。神の家に住み、(神とともに歩み)神をほめたたえる人が、幸いとされている。そこに安心と満足があるからです。

第4曲はドイツクワイエムの中心楽章であり、穏やかに
ブラームスの心情を象徴しているようです。

(C) **第7曲**

Selig sind die Toten, die in dem Herrn sterben von nun an.
Ja der Geist spricht, dass sie ruhen von ihrer Arbeit;
denn ihre Werke folgen ihnen nach.

『今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである。』

“霊”も言う。「然り、彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。

その行いが報われるからである。

ヨハネの黙示録 14 : 13

第7曲は、この曲のフィナーレであり、ブラームスの求めた人生の究極の解決が示されています。

この最終曲のテーマは「安息」、それは「主にあつて死ぬ者は幸い」、と第1曲の冒頭のテーマに対する解答として示される。主キリストを信じ従って歩み死んだ人は幸い、人は地上の生を旅して、その間をどのように生きたのかを最後に問われる。体の死があつても、それで終わりではなく、最終的には審判を待たなければならぬ(ヨハネ)。「死人」とは最終審判を待つ人のことで、審判によってすべての労苦から解放される。肉体的、精神的な労苦は現代の人の世にも通じます。はかない短い人生ですが、どのように生きたのかが死のときに大きい意味を持つてくる。神を信じ従って生きた人は救われる。その労苦は主によって解かれる、と「霊 Geist」も言う。静かに Selig sind die Toten と繰り返し歌われて全曲を閉じる。死への恐怖は消えて、永遠の憩いに敬虔に向かおうとする心を育(はぐく)んでくれるように。

参考までに、よく知られている聖書から出た言葉(諺)をほんの一部だけ記します。

◎目には目を、歯には歯を ◎七転び八起き ◎目から鱗 ◎豚に真珠 ◎人はパンのみに生きるにあらず
◎笛吹けど踊らず ◎一粒の麦死なずば ◎働かざるもの食うべからず

本稿では今回練習している第1曲、第4曲、第7曲についてまとめました。2, 3, 5, 6曲は別途後日に。
歌詞の日本語訳は文語・口語、意訳・直訳など種々あり、わかりやすさを前提に取り上げました。

4 ページ(C)を修正 2018/2/11

黒部で第九を歌う会 2017/10/6 島倉敏夫
写真編集協力 米田幹雄

ウィーン／楽友協会 黄金のホール

